博学多識のなんでも家
―三木英雄先生を偲んで

三木英雄氏略歴
一九一九年九月二十二日生まれ。京都大学工学部助教授を経て、五四年同志社大学工学部教授として入社。五五年同大学院工学研究科教授に就任。教務部長、工学部長、理工学研究所長、図書館長、計算機センター所長を歴任された。九〇年同名誉教授。
二〇〇三年一月十九日永眠　八十三歳

三木先生はもともと材料学・材料力学が専門で、金属の疲れや機械的性質、材料力学が主な研究領域であるにもかかわらず、全く分野の異なる熱力学、生産工学、自動制御工学などの講義をも担当され、どの先生方の講義も簡単に代わりを務められる博学多彩な、なんとも不思議な先生であった。

私が学生時代の夏、ハリス理化学館二階の先生の研究室にお伺いしたとき、退室間際に「これなんだか解るかな？」と机の上の数枚のレポート用紙を示された。アルファベットと数字の0、1だけがごちゃごちゃ無秩序？に書き並んだ得体の知れないものは、私にとっては紙くず同然であった。「これが今後の計算機の心臓にあたるプログラムの初歩の初歩だよ」とこれまで見たことも無い嬉しそうな顔で言われ、説明を始められそうになったので、これはかなわんと一目散に退室したのがつい先頃のように思い出される。四十年ほど前の話である。

この頃、電動計算機に代わって、電子計算機が旧帝大、大企業を中心に導入され始めていた。

この電子計算機の重要性をいち早く見抜かれ、同志社大学に大型電子計算機の導入を強力に推進されたのは当時要職を歴任されていた三木先生の先見の明によるところである。ほぼ同じ頃、三木先生ご担当の電子計算機法、プログラミング法の講義がスタートした。以前先生の研究室で紙くずだと思ったのはこれらのプログラムだと、この頃やっと気づいた。専門の材料力学の研究と並んで、この電子計算機が先生のライフワークになり、定年退職後も研究を進められ、目の不自由な方のために極めて有効かつ斬新なシステムを開発され無償で提供されたのは、新聞、テレビでご承知の方も多い。

機械系学科では年に数回、何かの理由をつけて教室ほぼ全員が参加する懇親会が開かれる。三木先生は胃の手術をされるまではいくらお酒を飲んでも崩れない紳士の酒豪？であったが、手術後は控えられていた。お酒を飲まれないにもかかわらず、非常に上手に場を盛り上げられ、皆が楽しめるよう常に細やかな気遣いをされていた。全く飲めない私も気がついたら先生の調子に乗せられ、後から〝しまった!!〟の後悔を何回したことか。

学問に厳しく一見近寄り難いところがある反面、非常に心優しく、気がついたら無礼とも思われるほど懐に入り込んで行けた先生で、懐かしい思い出を一杯作って下さった先生にもうお会いすることができないのが非常に残念である。

公私共に大変お世話になった三木先生のご冥福をお祈りします。

合掌

御牧拓郎（大学工学部教授）

美徳の人
―偉大な師、越智文雄先生を偲んで

越智文雄氏略歴

一九一〇年二月二十五日生まれ。三四年同志社大学文学部英文学科卒業後、同志社高等女学部教諭として入社。四七年同志社女子専門学校教授、四九年同志社女子大学助教授、五一年同教授、六七年同大学院文学研究科教授に就任。女子大学長も務める。八〇年同名誉教授。また、日本ミルトン・センターの名誉会長も務められた。二〇〇三年一月二十六日永眠　九十二歳

越智先生の突然のご訃報に接したのは、前期入試二日目の早朝である。昨春、ご自宅で骨折され、体調を崩されて、入院されていたという。病院での手厚い治療とご家族の必死の介護で、奇跡的に回復が進まれていた矢先のご逝去だったらしい。先生のご遺志で密葬を済まされた翌日、あの寒い朝に、お嬢様からお電話をいただいた時には、「巨星墜つ！」といった心境で、ただ呆然とした。「一九一〇年生まれだから、分かりやすいでしょ。ハレー彗星の地球接近も二度経験したのですよ」と昔、白い歯を見せて楽しそうに言われた記憶が、ふいによみがえった。人間が"mortal"（死すべき存在）である以上、いつか受け止めなければならない現実ではあるものの、越智先生と重ね合わすことができず、ショックで足もとがふらつくほどだった。

偉大な先生への尊敬をなんと表現すればいいだろう――とにかく高潔な方だった。徳富蘇峰、山崎為徳以来の〈同志社のミルトン研究の伝統〉を継承・発展され、長年にわたって日本のミルトン学界をリードされた碩学であり、女子大学長の要職を十四年も担われたご業績は言うまでもない。大学紛争の嵐が吹き荒れた厳しい時代に、思索家で学究肌の先生が、私学行政の中枢で余儀なくされたご苦労は察して余りある。そういう意味でも先生は、「ミルトンを生きておられた」と言えるだろう。散文*Areopagitica*において"a fugitive and cloister'd virtue"（逃げ腰の、修道院に閉じこもったような美徳）を断固拒否したミルトンの勇気と行動力は、越智先生に通じるものである。先生は常に背筋を伸ばして、毅然とした生き方を貫かれた。しかもどんな場合にも、謙虚で誠実であり、優しく温かく、寛大な方だった。まさにお人柄の輝きそのもので人を説得できる、稀有な教育者であった。

五年前、先生の米寿をお祝いして、女子大卒業生有志が集まったパーティーは、先生のお好きなラテン句"Dum spiro spero"（われ生ける限り、われ希望す）にちなんで、「DSSの会」と名づけられた。九十三歳のお誕生日をひと月先にひかえて、先生は天界へと飛翔されたが、最期まで「ぼくは幸せだよ」とおっしゃっていたという――見事としか言いようがない。今ごろ先生は、天上の音楽が流れる中、ミルトンやヴァージルとの会話を楽しんでおられるのだろうか。今はただ、天国の先生に、師恩への尽きせぬ感謝をお捧げしたい。

小山　薫（女子大学学芸学部助教授）

追悼　宇喜田敬介先生

宇喜田敬介氏略歴
一九二八年九月十六日生まれ。六三年同志社大学大学院文学研究科英文学科修了後、大阪府立布施工業高校教諭を経て、六五年同志社女子大学専任講師として入社。六九年同助教授、七五年同教授に就任。この間、図書館長、学芸学部長、短期大学部長などを歴任。九九年四月、同名誉教授。二〇〇三年三月十四日永眠　七十四歳

今年の三月十四日、七十四歳の生涯を終えられた。一月にお見舞いに伺った折には、もうすぐ退院の予定だと嬉しそうに言っておられたので、その後のことは、とても信じがたいことでした。浮き世の儚さをまたしても思い知らされた、としか気持ちを表す言葉が見つかりません。

先日、追悼の文をと依頼をうけた時、先生をもっとよくご存知の方が大勢おられるのになぜ小生ごときがと思いましたが、これもなにかのご縁だと思ってお引き受けいたしました。

先生は、十九世紀英国文学・文化の研究者としてよく知られています。なかでも、ディッケンズ、コンラッド、メレディスなど英国を代表する小説家を中心に優れた論考を発表されております。門外漢が言うのはおこがましいことですが、先生のお書きになったどの論文にも確かな読みに裏付けられた問題追求の誠実な姿勢が一貫してみられます。

雑なテキスト解釈が多々見られる昨今、もって他山の石とすべし、と先生はわれわれ若輩に無言のうちに教えておられるような気がします。

常々考えていたことですが、先生の批評精神の源には、太平洋戦争での日本の敗戦と戦後体験が深く係わっていたのではないでしょうか。ふとしたきっかけで戦前の政治や軍国主義について話が及んだとき、戦中派の反骨精神とでも言うべき確固とした信念を先生の中に感じた経験があります。そして同時に、それが戦後の民主主義に対する先生の諦観と倫理的な矜持につながっている印象を強くうけました。

そうであれば、先生がヴィクトリア朝の風刺画家であり挿絵画家であるジョージ・クルックシャンクに親近感をもっておられたのも当然のことでしょう。先生の冷静沈着な性格が諧謔や皮肉よりも風刺の精神に合致していたと思われます。

同志社女子大学が誇るクルックシャンクのコレクションを内外の研究者が利用できるように、小林章夫氏と共同で一九九二年にカタログを完成されたお仕事は先生の貴重な業績として末長く記憶に残るものです。

先生亡き今、願わくば同志社の中から先生の遺志を継いで、風刺精神の実践家にして研究者でもある後継が輩出されることを祈念します。

福田京一（女子大学現代社会学部教授）

この世は劇場
―近藤公一先生を偲んで

近藤公一氏略歴
一九二七年四月二十六日生まれ。五二年京都大学文学部文学科卒業後、愛知大学教養学部講師を経て、六一年同志社大学経済学部専任講師として入社。六三年同助教授、六九年同教授。八九年同名誉教授。
二〇〇三年三月二十三日永眠　七十五歳

近藤公一先生が亡くなられた。生前、「私、芝居道楽がすぎて、勘当されましたんや」などと、新任の先生を煙に巻いておられたが、事実そのとおりで、芝居に明け暮れた生涯だった。長身、頭髪も豊か、眼鏡をはずせば大づくりの目鼻立ちで、たいそう舞台映えのする風貌といえた。芝居で鍛えた技で、〔r〕の音をも舌端や喉のあたりで自在に転がしながら、当意即妙、ドイツの箴言や名句をひねり出す先生に、私たちは旧制高校のドイツ語教育のすごさを見せつけられる思いがした。恐らく先生は、深山幽谷、断崖絶壁の舞台を与えられれば、たちどころに、シラーやゲーテの作品の一節を朗々と吟じたことだろう。

かつての第二外国語研究室には、いわゆる芸達者とされる先生方も揃っていた。忘年会や新年会、そして歓送迎会などの折には、そうした芸に座がわいたが、近藤先生のそれはひときわ抜きんでていた。空になったビール瓶を手に、やおら立ち上がった先生は、あるときは浪曲師や活弁士、またあるときには狂言師や義太夫となって唸りだす。そのとき小道具の、息を吹き込まれ、手のひらで叩かれたビール瓶からは、法螺貝や尺八の音が搾りだされ、ひちりきや鼓のお囃子がわき上がり、さらには今まさに桟橋を離れようとする連絡船の汽笛やポンポン船のエンジン音など、実にさまざまな音色がこぼれでたのだった。

職場ではあまりご自分の主宰する劇団の話はなさらなかった気がする。時折、近藤公一演出と記された府や市や労組関係のポスターやパンフレットを目にしたが、そんな時でも先生の様子は、別段いつもと変わるところはなかった。しかし、いわゆる前衛劇団だったから、監督兼演出家兼俳優はいいとしても、興行主として金策にも走り回らなければならなかったようで、あるときは自宅を抵当にいれたとの噂さえ流れた。

若い頃からブレヒトの演劇に共鳴した先生は、この詩人を研究対象としながら、演劇理論を組み立て、舞台でその実践を試みた。先生は終戦間際に学徒動員させられ、からくも帰還できた世代のひとりで、戦争の何たるかを身をもって体験している。したがって、とりわけブレヒトの反戦思想はそのまま先生の生きざまと重なり、手がけた芝居の演出には、常にそうしたものへのこだわりがあったように思われる。同志社在職中に、演劇分野での功績に対し、京都市から芸術功労賞を贈られたが、「好きな芝居でおもろいことをさせていただいたうえに」と、畏まっていた先生の姿が目に浮かぶ。少しばかり早すぎた死が寂しい。

幅　健志（大学言語文化教育研究センター教授）

社会科の終身主任
―濱本徹次先生を偲んで

濱本先生のご尊父、濱本喜三郎中将は太平洋戦争開戦時の北方軍司令官、終戦時の京都師団長。先生も國學院大学卒業後、輜重兵連隊に入隊され、自動車部隊に勤務されていた。当時、先生は千余ページの大著『皇軍史』を記述されている。「補給を軽視した軍隊は勝った試しがない」とは先生の口癖であった。終戦時の第二山水中学校長浜島高義大佐がご尊父と親交があったので、先生は復員と同時に第二山水中学校教諭として着任された。

香里学園時代、先生は日本史と漢文を担当されていたが、クラブ活動では野球部の顧問をしておられた。深草練兵場跡を練習場に部員を鍛えられ、大阪府大会準々決勝まで進出された。これが香里、同志社を通して最高の成績である。

同志社になってから二十年ほど、先生は社会科主任を務められたが、入学試験のとき各教員が作成してきた問題を整理されるのが先生の仕事であった。先生の校正は精細を極め、教えられるところが多々あった。先生は教室での授業のみならず、史跡見学にも力を注がれていた。あるとき、秦川勝の墓の見学について行ったことがあった。墓前で突然「今日は喜多先生も同行しておられるので、喜多先生に秦川勝の説明をお願いする」と言われた。私が秦川勝について若干の知識を持っていたから、生徒の前で恥を掻かずに済んだ。帰校後、「先生、酷いですよ」と言ったら、先生は顔を赤らめて「フッ、フッ、フッ」と笑っておられたが、これが茶目っ気をおこされた後の先生の癖であった。定年前、先生はマンドリン部の顧問をしておられたが、合宿のときは必ず付近の神社について綿密な下調べをして来られた。例えば、高野山の合宿では、丹生都比女神社を訪れた。先生は神職の資格を持っておられたので、その説明は詳細を極めた。

また先生は多芸多趣味の持ち主であった。囲碁は関西棋院の五段で、北川博造先生や坂東重光先生は「お師匠さん」と呼んで、先生から手ほどきを受けておられた。京都四条大宮の雀寺での謡曲発表会に赤尾秀之助先生と二人で行き、先生のお謡いを聞かせてもらったこともあった。定年後は、晴天のときはゲートボールに、雨天のときは囲碁に興じておられたという。

今一度、先生とお話ししたい気持ちで一杯である。

喜多正明（香里中学校・高等学校元教諭）

濱本徹次氏略歴

一九一八年五月五日生まれ。國學院大学史学部卒業後、輜重兵連隊に入隊、自動車部隊に所属。復員後、四五年第二山水中学教諭として着任、その後同志社香里中学校・高等学校教諭として勤務する。八三年定年退職。二〇〇三年四月二十五日永眠　八十五歳